メンバーの優勝ラッシュ！
県知事盃争奪では3冠。ミッドアマ、石井さんが5人のプレーオフ制す。

第59回目となる伝統の栃木県知事盃争奪の各カテゴリー決勝大会が9,10月にかけて開催された。今年は塩カンメンバーの活躍がめざましく、11月21日に開催された合同分科委員会の忘年コンペでも、緑川文雄キャプテンから祝意が示された。県知事盃では加藤仁美さんがミッドクイーンズの部で79(36,43)、中島正さんがグランドシニアの部で69(36,33)、一般男子の部で井上雄さんが69(35,34)で、第14回県ミッドアマ選手権では、石井淳二さんが73(39,34)で5人のプレーオフを制してそれぞれ優勝した。

塩原は国体女子の開催を機に、コース整備やカート乗り入れ、カートナビ導入などプレー環境の整備に力を入れた。それだけに、この4冠は〝国体開催のレガシー〟という評価も。Web会報では各種大会優勝者に栄冠を手にした感想や今後の抱負などを寄せてもらって、2024年の掉尾を飾ることとしたい。

【4冠への足跡】

☆ 関東倶楽部対抗男子
- 予選(5/16) 準優勝
  栃木第3会場:矢板カントリークラブ　17 倶楽部参加
- 決勝 (6/11) 7位
  会場:葛城ゴルフ倶楽部　42 倶楽部参加

☆ 関東倶楽部対抗女子予選(5/23)
11位
会場:塩原カントリークラブ　22 倶楽部参加

☆ 第5回栃木県クラブ対抗競技大会男子(10/29)
22位
会場:鶴カントリークラブ　35 倶楽部参加

☆ 第4回栃木県クラブ対抗競技大会女子(4/16)
14位
会場:ニューセントアンドリュースGCJ　25 倶楽部参加

【栃木県知事盃】

◎ミッドクイーンズの部（9/3）

優勝　加藤仁美

会場：ハーモニーヒルズゴルフクラブ

◎グランドシニアの部（10/4）

優勝　中島　正

会場：県民ゴルフ場

◎一般男子の部（10/11）

優勝　井上　雄

会場：矢板カントリークラブ

☆ 栃木県ミッドアマチュア選手権（11/7）

優勝　石井淳二

会場：セブンハンドレッドクラブ

☆ 栃木県支部対抗ゴルフ大会（11/14）

優勝　那須塩原市

7人でチームを編成、うち4人が塩原カントリークラブ研修会（石井淳二・河本泰司・菊地一郎・菊地諭史）

会場：凧月カントリークラブ

☆ 第2回那須塩原市ダブルスゴルフチャレンジカップ（6/6）

優勝　石井淳二・稲沢ペア

会場：塩原カントリークラブ

【寄稿特集】
～栄光の4人が語る。ゴルフへの思いと喜び～

【栃木県知事盃争奪・ミッドクイーンズの部】
還暦に夢かなう。新たにクイーンズ頂点を胸に秘め。

加藤仁美

念願だった伝統ある栃木県知事盃に60歳の還暦の年に優勝することができました。長い競技歴の中、知事盃には一般女子の部やクイーンズの部では最上位が準優勝と、優勝には一歩届かないことが多く銀盃達は箱の中に眠っています。年齢を重ねて新しい年代の部でようやく大きな銀盃を我が家に飾ることが出来ました！

大会は台風シーズンの9月3日ハーモニーヒルズゴルフクラブ。前週には台風、大雨や今シーズンの暑さでコースコンデションはかなり不良、しかも天気予報ではいつ大雨になるかわからない不安定な雲行き。私自身は前日に埼玉県市町村対抗決勝をさいたま市代表選手として、晴天の名門・霞ヶ関カンツリー倶楽部でプレーした（団体優勝）翌日のため、全く真逆の環境の大会に、実は・・・、かなり戸惑ってしまっていました。トリッキーなコースレイアウトと一般女子と同日のため、ピンも厳しいプレイスメント。絶体絶命の？状況。

案の定、前半は43と、罠にはまり全くスコアメイクが出来ませんでした。「せめて70台では上がりたい！」。その一念で後半はコースにも慣れてきたこともあってか、いつものマネジメントに修正できました。最終ホールで4㍍のバーディーパットがカップインして目標の79！競技委員からプレーオフと言われて正直驚きました。前半、いいスコアの選手が複数いたので。

今にも土砂降りになりそうな暗がりの中のプレーオフ。皆さんの早く決着して欲しい願いが通じたのか？2番ショートホールで6㍍位の上りフックラインが入りバーディとして終了、直後に土砂降り！競技の時にオンした場所に近いラインでしっかり打てた幸運で頂いた優勝でした。

いつかは優勝したい！という夢を密かに持ち続けていると叶うものかな？と。ゴルフは年代別に大会もあるので、気長に明るく楽しみ高みを目指していれば、健康維持や多くの素敵な仲間も恵まれる生涯スポーツだな！と。いい趣味に出会えて私もラッキーです。

最後に、『2024年栃木県知事盃は塩原カントリークラブのメンバー3冠！』。塩カンコースでの研鑽ができてこその結果と、スタッフの皆様に心より感謝申し上げます。そして塩原女子研修会の会長としては、ゴルフ競技を研鑽する素晴らしさを女子研修会の皆さんにさらに伝えていければと思います。

追伸 クイーンズの部では1打差で届かず、準優勝となり〝塩原4冠〟を逃してしまいましたことはお詫びします。私の来年度からの新たなる密かな目標といたしますね！

【栃木県知事盃争奪・男子グランドシニアの部】

挑戦し続け45年。女房と100名山挑戦で、足、腰鍛え。家族、先輩諸氏に感謝。

中島　正

私のゴルフは、二十二歳で会社の上司にすすめられて始めました。高校野球をしていたので足腰には自信がありましたので、三ヶ月間毎日五百球打ち込み、一年で70台が出るようになりました。しかし、飛ぶが曲がるというお決まりのパターン。杉本英世プロとラウンドする機会があり、いろんなことを指導して頂きました。

最後に言われた教えが、小技とパターは実戦経験で上達、ドライバーの練習は毎日できるから、飛ばすことを覚えなさい。そして、競技ゴルフに参加しなさい。精神力が強くなる。この言葉が私の基礎になっています。

私が勤めている会社が真岡市にあり、栃木県知事盃の参加資格があるので挑戦し続け45年が過ぎました。当初、決勝は塩原カントリーで毎年開催されていて、二十六歳の時、初めて決勝に出場し、周りの人が上手に見え雰囲気に飲まれてゴルフになりませんでした。

そんな私を見て声をかけてくれたのが、同伴競技者の塩原カントリーのメンバーさんでした。張り詰めた緊張感が和らぎ、後半はゴルフを楽しむことが出来ました。この人のように心の広いゴルファーになりたいと目標を決め、塩原カントリーの会員にと思ったのですが、三十歳になった年に父が他界し、兼業農家を継ぐことになり、コースに出る回数も少なくなりましたが練習は毎日続けました。

農業をして気づいたのが、足腰を使う力仕事の後は、ドライバーの飛距離が伸び、方向性が良くなることでした。プロが言っていた、飛ばすことを覚えなさいは、足、腰を鍛えることから始めなければダメと気づき、筋トレや体幹トレーニングを始めました。五十歳を過ぎた頃、女房が日本百名山を登りたいと言い出しビックリしましたが、ゴルフ三昧の私には反対することも出来ず、ひとりで行かせるわけにはいきませんので、足腰の鍛錬になると思い始めました。全山制覇は出来ていませんが、五十座を踏破しコロナで休止しています。今は夕食後、毎日一時間、女房と早歩きウオーキングを続けています。歳を取ってから共通の趣味を持つことっていいことだと実感しています。

話をゴルフに戻し、四十、五十代の頃はドライバーの飛距離で自信があったので、いろんな大会に挑戦したいと思い、ゴルフダイジェストやアルバが主催の大会に参加して、予選、関東ブロックを勝ち抜き全国大会へ。しかし、成績は残念な結果でした。挑戦し続けましたが、思うような成績を残すことが出来ませんでした。いい実績を残すには、ホームコースを持ち、自分より上手な人と回ることが大切と思いました。そう思ったとき、最初に浮かんだのが、若いとき入会したかった塩原カントリーでした。

入会後、知事盃決勝初参加で緊張していた私に、声をかけてくれた方にはお逢い出来ず残念でしたが、栃木シニア会やいろんな大会にお誘いしてくれる方に出逢うことが出来ました。中ちゃん、正くんと呼んでくれる諸先輩がたくさん出来、孫たちにも応援され楽しいゴルフライフを送れています。

今年の知事盃グランドシニアで優勝出来たのは、経験豊富な諸先輩のアドバイスや各種大会で顔見知りの方が多くなり、朝のあいさつや会話などで緊張感がほどよく解かれるようになったからだと感じています。これからも、常に課題を見つけ、謙虚さを忘れず、各種大会に参加し、挑戦を続けて行きたいと思っています。

最後に、家族を含め私と知り合った方々に感謝です。感謝の気持ちを忘れずに楽しみたいと思います。ありがとうございました。これからもよろしく、おねがいします。

【栃木県知事盃・一般男子の部】

晴天の霹靂。これは現実？次は激戦クラブチャンピオン。

井上 雄

初めに、日頃からご支援をいただいている塩原カントリークラブの皆様、そして共にプレーしている研修会の仲間たちに心から感謝申し上げます。

全てのゴルファーそれぞれの嗜好がありますが、自分は30年競技ゴルフに取り憑かれています。月一ゴルファーだった自分が、約20年前、那須塩原に引っ越し、ラウンド回数も激増し様々な大会に参加することになります。これまで競技に挑戦するからにはJGAの全日本大会に出場することを目標とし取り組んできました。今年はその最大の目標を、シニアではありますが達成することができました。

知事盃の優勝はまだ自分の中で現実的ではなく、過去、10回程出場した知事盃決勝では、30位前後より上位へ顔を出すことはありませんでした。その知事盃で優勝することは、まさに青天の霹靂です。

しかし、優勝したからには、そんな事は言ってはいられません。今まで以上に真剣にゴルフと向き合い、名に恥じないゴルフ道を歩んでいこうと思います。

これからの目標になりますが、2012年に歯科医院の開設祝いとして高根沢守一さんから塩原CCの会員権を譲渡して頂きました。毎年、クラブチャンピオンの結果を気にされておりその度に残念な結果を報告してきました。その高根沢さんが今年の春に亡くなられました。

自分としてはとても悔いが残っております。来年からの目標として栃木県屈指のクラブチャンピオン激戦トーナメントを勝ち上がることを目指して精進して参ります。競技ゴルフはとても辛く、途轍もなく楽しい。

これからも塩原カントリークラブの一員としての責任を果たし、皆様と共に素晴らしいゴルフライフを楽しんでいけることを願っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【第14回栃木県ミッドアマ選手権】

ゴルフで人の出会いと学び、生活の一部。選手会として関東、全国へ。

石井 淳二

自分にとってゴルフとは、生活の一部に感じられます。プレーも同じですが、日々どれだけゴルフに関わることができるかが、上達の第一歩と思い日々精進しております。また、ゴルフを通じて多くの方に出会えたことも、私にとって大きな収穫であり、多くのことを学ぶこともできました。

今回、二度目のミッドアマ優勝も支部対抗優勝も多くの仲間のおかげです。また塩原カントリークラブに所属したこと、選手会の皆さんと出会えたことが自分のゴルフ人生の宝となっております。

ゴルフは個人のスポーツですが、本当に多くの仲間に出会えたことが幸せです。今後も塩原カントリークラブ選手会の一員として、栃木県はもとより関東、日本で活躍できるよう努力を惜しまず邁進していきたいと思っております。

本当にゴルフをして来て良かったです。

栃木県知事盃争奪・ミッドクイーンズの部
優勝　加藤仁美　選手

栃木県知事盃争奪
男子グランドシニアの部
優勝　中島 正　選手

栃木県知事盃・一般男子の部
優勝　井上 雄　選手

第14回栃木県ミッドアマ選手権
優勝　石井 淳二　選手

優勝者続出の報告に大きな拍手。 分科委員会忘年コンペ

恒例の塩原カントリークラブの分科委員会コンペが11月21日に開催された。プレーに16人が参加、表彰式を兼ねた委員会には2人が加わった。堀越社長があいさつの中で、この日のコンペ賞品のお菓子「御用邸の月」がメンバーで94歳の今日も元気にプレーをされている片桐俊輔さんの「お菓子の城」の商品であることを披露。コース委員の小笠原勝氏の理事就任の報告があった。

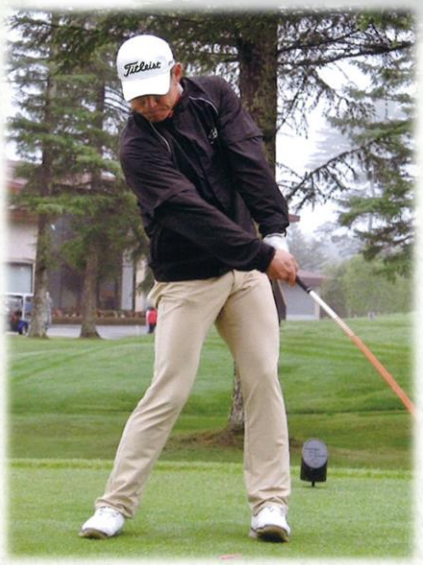
委員会報告に移り、キャプテンでもある競技委員会の緑川委員長から、月例会競技の3クラス分けについて、検討の結果、現状維持を続けるとの説明があった。コース委員会の阿久津副委員長からコースボランティアについての報告、及びコース状況についての説明があり、フェローシップ委員会の後藤副委員長から「コース乗り入れによる評判が上がっている」という評価があった。総務委員会の高田委員からピンクティエリアの傾斜が気になる旨の意見が出され、検討課題となった。

なお、忘年コンペは優勝・薄井孝子さん、準優勝・四ツ谷定男さん、3位・緑川文雄さんだった。

お知らせ

皆様からご好評をいただいておりました「中里プロのコース攻略」に続き、年明けから「中里プロへのQ＆A」コーナーを始めます。

初回は塩原カントリーの魅力を語っていただき、次回から皆様の質問にお答えしていきたいと思いますので、コースに関する事・練習法・技術的な事など、是非聞きたい事をリクエストして下さい。皆様からのご質問お待ちしております。



那須の小天狗―小針春芳伝 27

井上安正

コースレコード

小針春芳は九十歳を目前に、公式戦の戦績は別にして、自分のプロ人生を数字で振り返ったことがある。十九歳から八十九歳まで、回ったラウンドは一万回を超えていた。ホールインワンは試合で二回、プライベートで五回、コースレコード八回、エージシュート二十四回（公式戦のみ）。これが、小針の帳尻だった。小針はメモ魔というほどではないが、数字や試合内容などをよく記録していた。だから、これらの数字は正確なはずだ。

小針はコースレコードを刻むことに意欲を持ち続けた。プロ入りのきっかけとなった那須ゴルフ倶楽部での招待競技会で出した18ホール69が、自分が出した最初のコースレコードで、その後破られていないことと、無関係ではないだろう。それだけでなく、自分との戦いとなるゴルフという競技で、精進の成果がはっきりと出るこの記録に賭け続けたともいえる。

米海軍航空隊ゴルフクラブ（神奈川・綾瀬町）での第二回厚木米航空隊関東プロ招待競技で、62のコースレコードを出した。小針の好みからすれば、グリーンが重過ぎたが、アウト33、イン29、1イーグル7バーディーだった。ハーフ20台は生涯でこの時だけ。この62は生涯のベストスコアでもあった。

我孫子ゴルフ倶楽部でもプロ月例競技でレコードを出した。連続ボギーでスタート、5番バーディー、6番イーグル、7番バーディーで午前は34、午後、11、12、17番をバーディーとし33の67。ダブルボギーでスタートして達成したレコードには驚いたが、「あきらめない」ことの大切さを胸に刻むことになった。鷹之台カンツリー倶楽部（千葉）では、プロ月例競技での68がある。風が強く、普段はアイアン5、6番で攻めるホールでスプーン（3番ウッド）を使うほどだった。パーオンは少なかったが“寄せワン”がよく効いた。

船橋カントリー倶楽部（千葉・船橋市）では、6アンダーの66がある。一九六六（昭和四一）年の関東オープン2日目。初日に陳清波が67のコースレコードで首位に立ったが、翌日、小針があっさり更新してしまった。6900ヤードの長いコースで、アウトはパットが面白いように入って32。インではバーディーが取れずに苦しんだが、最終ホールを残して5アンダー。最終パー5の第3打70ヤードを1・5㍍につけ、真ん中からドンと入れた。ただ、決勝では74、74と崩れ6位に終わった。

このほかでは「登戸コース」と呼ばれていた川崎国際生田緑地ゴルフ場（神奈川・川崎市）の67、名四カントリークラブ（三重・四日市市）の67、旧程ヶ谷カントリークラブ（神奈川・横浜市）の64がある。程ヶ谷の旧コースの最終年のプロ月例競技でマークしたもので、表彰式で支配人が「来年から新コースになりますので、64のコースレコードは絶対破られません」と紹介されたのを、小針は終生忘れなかった。

“大正五強”とされる、戸田藤一郎、中村寅吉、小野光一、林由郎の中で、とくに中村とは、ゴルフ記者の間で「永遠のライバル」とされ、盛んにそう書かれた。しかし、小針に言わせれば「憧れであり、目標だった」という。中村は、小針がプロとして認められた、あの第二回関東プロ招待競技に二十五歳の新鋭プロとして参加していたし、小針のプロ人生の節目の試合には、不思議と中村が絡んできた。

プロとして初優勝した、一九五五年（昭和三〇）年の関東プロマッチプレー（千葉・我孫子ゴルフ倶楽部）の決勝は中村が相手で、4アンド3で勝った。「あのころ、中村は日の出の勢いがあった。その中村に勝てて『これで、プロとして食っていけるかな』と思った」とはすでに書いた。それから四年後の関東オープン（千葉・鷹之台カントリー倶楽部）で、中村は八度目、四連覇の優勝をねらっていた。二日間で72ホールストロークプレーを戦ったが、小針が初日の36ホールを145ストロークでトップに立ちそのまま逃げ切った。二位は2打差で石井朝夫、中村は四位だった。小針にとっては初のカナダカップ出場となったメルボルンにも中村と行った。小針が勝った一九八九（平成元）年の関東プロゴールドシニアでも、中村と最後まで優勝争いをした。

フックグリップで構え、左腰の鋭いターンで目標にボールを運ぶドライバー。アイアンの切れも素晴らしかった。フェード回転で高速グリーンでもピタピタ止めた。「あの技術をものにするのは並大抵の努力ではなかったと思う。技術的にもとても勝てる相手ではなかった」と評していた。中村は「パットの神様」と表され、日本のゴルフブームに火をつけたといわれる、霞ヶ関カンツリー倶楽部でのカナダカップの時は、高麗芝の高速グリーンでそれがさえわたった。

しかし、小針の目には「短いパッティングが唯一の弱点」と映った。それは技術ではなく、心の問題のように思えた。ショートパットを残し、人のパットを待つのが嫌のように感じられたからだ。だから「お先に」が多く、それをはずすことがよくあった。中村は小針とは逆で、着るものも派手で、ほとんどのプロが鉄道やバスを乗り継いで試合会場入りしていた時代にスクーターを常用し、車を買ったのも早かった。

スイングスタイルは小針と基本的に違ったから、参考にはしなかったが、グリーンの外からパターで寄せるアプローチは「盗んだ」という。中村のパターはテキサスウェジと呼ばれ、グリップをギュときつく握って打つテクニックを手本にしたという。中村は二〇〇八（平成二〇）年にこの世を去ったが、その二年前に林由郎、小野光一と伊勢原カントリークラブ（神奈川・伊勢原市）でのラウンドが最後になった。小針が言い残した中村評の数々は、名人の心は名人にしかわからないことを物語って余りある。

スニードからの手紙

一九九一（平成三年）年、第一回の日本シニアオープンにサム・スニードが招待された。それを前に、小針のもとへ英文の手紙が届いた。英語の出来る人に訳してもらったら、「久しぶりに小針に会えるのを楽しみにしている。健康に気をつけて再会しましょう」とあった。

手紙はスニードからだった。誇らしいことについては、人に多くは語らない小針だったが、江場には「ほかの選手には来ていなかったぞ」、「ワイのお宝だよ」と、英文の手紙を見せて打ち明けた。小針が語った数少ない自慢話だった。

「人生の最後にいくら財産を得たかではない。何人のゴルフ仲間を得たかである」。これは、球聖・ボビー・ジョーンズが残した言葉である。ボビーを尊敬していた小針は、この言葉の重みを人一倍感じていた。「これは、ゴルフを愛する全ての人にとっての名言だ」とよく言っていた。

人の出会いと言えば、“ジャンボ”こと尾崎将司の打球を初めて見た時の衝撃は「尋常ではなかった」という。ジャンボは関東オープンがデビュー戦で、佐藤精一、小針と回っている。小針は「それまで海外での試合経験もあったからから多少のことには驚かなかったが、あの飛距離にはびっくりした」という。

ドライバーで打ったボールが、「グーンと低く出て落ちてこない」ように感じたという。小針がナイスショットして5番アイアンなのに、ジャンボはピッチングを手にしてコントロールショットだった。「新しい時代が来たと思わないわけには行かなかった」と打ち明けている。

二〇一〇（平成二二）年五月、名古屋ゴルフ倶楽部和合コース（愛知・東郷町）での第五十一回中日クラウンズの最終日。若武者・石川遼が12バーディー、ノーボギーの58のコースレコードを出して優勝した。それまでのコースレコード61を五年ぶりに塗り替えたばかりか、世界六大ツアーの世界最小ストロークも更新した。アウトの9ホール28、バーディー12は大会新記録だった。最終組が18番をホールアウトする1時間も前に上がりながら6打差を逆転しての優勝だった。

小針にとっても優勝こそないが、このトーナメントは相性がよかった。2位が一回、3位が二回、5、6位が各一回だった。安田春雄が優勝した第九回大会では和合コースで初日30、35と謝敏男と並んでトップに立ったことがある。「（石川の）50台とは考えられないスコアだった。彼は数十年に一人の逸材だと感じた。ショットに気を取られがちだが、パットがうまい。一流選手はパットがうまいのが最低条件だ」とほめたたえた。

那須ゴルフ倶楽部で出会ったアマチュアの中で常陸宮ご夫妻は別格で、那須に避暑に来た時には毎年と言っていいほど一緒にラウンドさせてもらった。最初に声がかかった時、宮内庁の担当者に「私は田舎もので言葉遣いの心得もありません。時には乱暴な言葉を使うかも知れませんが。お許しください」と伝えていた。

プロ野球の国鉄、巨人で活躍した400勝投手・金田正一のマナーの良さが印象に残っている。野球選手に共通しているのは礼儀をわきまえていたことで、「ラウンドしていて、実に気持ちがよかった」という。

プロレスの力道山が全盛期だった昭和六十年代後半だったと小針は記憶しているが、ハーフを一緒にラウンドしたことがある。理由はわからないが、午前中はあまり機嫌がよくなかったらしい。午後はラウンドレッスンだったが、気軽に回れた。腕前はハーフ45でうまかったし、クラブのグリップが太くて驚いた。日本にはそれほど太いグリップはなく、おそらく外国で手に入れたのだろうと思ったという。

ヘビースモーカーの小針は、戦後はしばらく「光」を吸っていたが、ほどなく両切りの「ピース」に変えた。ピース箱の印刷を担当している会社の社長とラウンドして、あの藍色を出すことの難しさを聞かされたのも思い出深いと話していた。

人間嫌い

それだけで「那須の神様」と言われたとは思わないが、すでに書いたように、小針は那須を離れようとはしなかった。中村寅吉、小野光一、林由郎も所属を変えたが、小針は二〇〇八（平成二〇）年一一月にプロ登録を取り下げるまで那須一筋だった。ゴルフの道に入った理由について、「ゴルフしかなかったから」と答えた小針だが、ここでも聞かれれば「（那須を）出る理由がなかったから」と言うだけだった。

江場友幸は「日本オープンに勝ったころは、その頃の年収の三倍は超える条件で、いくつかのゴルフ場から誘われたよ」と、本人から聞かされたことがある。那須ゴルフ倶楽部は恵まれた練習環境を与えてくれたうえに、家族を養うのに十分な給料がいただけた。トーナメントへのエントリーフィー、

交通費、宿泊代もすべて負担してくれた。トーナメントに勝てば優勝祝賀会を開いて、奉加帳を回して祝い金も集めてくれた。

「ありがたい」という感謝を超えて、「だから強くなれた」という思いが脳裏から消えることはなかった。那須ゴルフ倶楽部は親も同然、驚くような高額待遇を提示されても、首を縦にすることはなかった。「親を裏切れますか」。それが那須を出なかったわけだ。（つづく）

編集後記

「今年の快挙はWeb会報に遺し、語り継ぐべきだ」。10月の理事会での衆議一決をうけ、社長を通じて勇者4人に寄稿をお願いしたところ、全ての方々から快く応じていただいた。それが寄稿特集に実った。この快挙はゴルフクラブ、カントリークラブの双方にとって嬉しいこと、このうえない慶事である。さて、来年塩カンでは来年の新企画が練られている。鬼に笑われるので、それは年が明けてからにしよう。

井上安正